

オウエン主義，協同思想，失敗の残像， あるいは神話の創作

オフエリー・シメオン／結城 剛志 訳

はじめに

- 1 オウエン主義の浪費と資金難
- 2 一つの運動，二つの協同思想
- 3 失敗と再生，神話の創作

はじめに

「イギリス社会主義の父」と呼ばれたロバート・オウエン（1771～1858年）は、19世紀以来の協同組合運動の創始者としてもよく知られている⁽¹⁾。この称号はオウエンの名に冠するにふさわしいものであろう。1828年から1845年にかけて、オウエンが彼の支持者たちを束ねていくうちに、イギリスでは「オウエン主義」「社会主義」「協同思想」といった言葉は、次第に同じことを指すようになっていった。じっさい、大部分のオウエン主義者はいろいろな生産者協同組合や消費者協同組合の組合員としても活動していたのである⁽²⁾。購買高配当を普及させたことで有名なロッチデール先駆者組合の組合員は、歴史上最初の近代的な協同組合員だと考えられるが、同時に熱心なオウエン主義者でもあった。

協同組合はオウエン主義の歴史に特別な位置を占めている。そして、オウエン主義には「ユートピア」社会主義の一形態であるとのラベルを貼られることが多かった。このことから分かるように、研究者たちは、オウエン主義が失敗に終わったとの帰結に着目してきた。最も重要な事件は、1845年のクイーンウッド共同体（ハンプシャー州）の破綻である。オウエン主義は、コミュニタリアン（共同体主義）の路線で、世界を再構築しようとする理想主義的な信念をもっていた。そして、クイーンウッド共同体はその運動の中心をなしていたのである。反対に、協同組合が今日まで持続しているのは、経済的な観点からみても、社会的な観点からみても、より現実的な社会主義に

(1) Beatrice Webb, *The Co-operative Movement in Great Britain*, London, Sonnenschein & Co., 1899; George Jacob Holyoake, *The History of Co-operation in England*, London, T. Fischer Unwin, 1906; Ophélie Siméon, «Entre utopie et Père du socialisme: réceptions de Robert Owen en Grande-Bretagne», *Lien social et Politiques*, 72, 2014, pp.19-37.

(2) Peter Gurney, *Co-operative Culture and the Politics of Consumption in England, 1870-1930*, Manchester, Manchester University Press, 1996, p.144.

立脚しているからだと考えられている。そして、協同組合は、自分たちのユートピア的な起源を手放して、自由放任型の資本主義にたいする現実的な批判を行ったイギリスの社会主義を象徴するともいわれている。イギリス社会主義の教科書は、このように自分たちの歴史を解釈することで「ロッチデール先駆者組合」の神話を作り上げてしまったのである。こういった歴史の解釈は1860年代の協同組合復興期に顕著になり、その後フェビアン協会にも受け入れられるようになったとはいえ、オウエン派の協同組合の歴史には多くの紆余曲折や失敗もあったことが見落とされている。オウエン派の協同組合の変節は、さまざまな外部要因に起因するだけでなく、協同思想の定義をめぐって協同組合の内部で繰り返されてきた、広範な意見対立にも起因している。なかでも、チャーチストが一番重要な議題として取り上げた、民主主義的な要求との両立可能性をめぐって意見が対立することが多かった。こういった、オウエン派の協同組合の内部で生じた意見対立に関する問題はあまり知られていないため、とくに重要である。本稿の目的は、今日に至るまで「ユートピア」的な側面に矮小化されて理解されてしまっている、オウエン派の協同組合運動の内部で生じていた確執とその後の顛末を再評価することにある⁽³⁾。そのために、初期の協同組合の事例を取り上げて、それぞれの実践を比較し、その帰結がどのように解釈されてイギリス社会主義の伝統に組み込まれていったのかを検討する。

1 オウエン主義の浪費と資金難

(1) 急進派と協同組合派——運動の起源

ロバート・オウエンの思想の中心にはいつも協同組合の原則があった。1800年から1825年までの間、スコットランドのニューラナーク紡績工場の総支配人を務めていたオウエンは、資本主義の行き過ぎを告発する開明的な工場長として、イギリスの政治舞台に躍り出た。新しい産業の時代が到来して、イギリスはそれまで経験したことのないような目覚ましい繁栄を見せていた。それにもかかわらず、本質的に個人主義的な工場制度は、国富の主要な生産者であるはずの労働者階級を貧困な状態に押し留めていた。オウエンはこのような社会矛盾を目の当たりにして、工業化前から続く地域的な伝統社会と近代的な経済社会を和解させようとしたのだ。そのためには工場制度と私的所有制を廃止しなければならないとオウエンは考え、自発的なコミュニティの連合体として社会を再組織することを企図し、それを「協同の村」と名づけた。協同経済に舵を切るためには、無制限の競争に依存してはならず、むしろ土地と財の共同所有と生産的階級への公正な支払いを基本としなければならない。そうすることで初めて富の公平な再分配が保障され、個人の幸福と社会全体の繁栄への道が拓かれるのである⁽⁴⁾。

(3) Gareth Stedman Jones, "Utopianism Reconsidered. Science and Religion in the Early Socialist Movement", in Raphael Samuel (ed.), *People's History and Socialist Theory*, London, Routledge, 1981, pp.138-144; Gregory Claeys, *Citizens and Saints. Politics and Anti-Politics in the Early Socialist Movement*, Cambridge, Cambridge University Press, 1989.

(4) Robert Owen, *Report to the County of Lanark*, 1820, p.15; J.F.C. Harrison, *Robert Owen and the Owenites in Britain and America. The Quest for the New Moral World*, London, Routledge, 1969, p.79.

当初、オウエンは、ニューラナークで働いていた頃に身についた博愛的な父親のような語り口で、もっぱら支配階級に向けて「新しい社会観」を説いていた⁽⁵⁾。ところが1820年代になると、オウエンの理論は、イギリスの急進派、とくに共済組合、労働組合、協同組合などのさまざまな労働者階級の制度に加入する、工場労働者や職人の間で注目されるようになった。こういった政治との関わり方は、相互扶助の古い伝統のもとで構築されたものであった。歴史上初の協同組合だといわれる、スコットランドのフェンウィックは、1769年に織工たちによって設立され、そこでは食品を大口で購入する手法が確立された。とはいえ、オウエン思想への支持の広がり、イギリスの近代的な工業化が進められる過程で、工場制度が驚くべき水準の貧困を引き起こしたという歴史的な文脈を無視することはできない。その渦中にあった協同組合員は、オウエンが『ラナーク州への報告』(1820年)で展開した労働価値説に強い関心をもっていた。オウエンは、労働者が生産と取引関係を自分たちで支配すべきであると主張し、その事業体を共同体建設事業の触媒として利用した。さらにオウエンは、「協同の村」の内部では、賃金はもはや個人主義的な市場の法則に従うことはなくなり、むしろ労働時間に基づくことになる、と説いていた。こうして、黎明期のオウエン主義運動にとって、生産者と消費者の協同組合は、将来の土地共同体を建設するための主要な手段となったのである⁽⁶⁾。この方法は、1831年5月の第1回協同組合大会で定式化された。この大会では、250の協同組合の代議員たちがオウエンへの支持を公式に宣言したのである。さらに、バーミンガム協同組合連合会の決議を受けて、協同組合は、反個人主義的な協同思想の正しさを例示するために、全国的な規模で共同体を建設するための資金集めに協力し、人手を提供することを決議した⁽⁷⁾。この二重の目標に沿って、1839年にクイーンウッド共同体が建設され、これがオウエン主義運動の公式の旗艦共同体となったのである。

(2) 資金難

前項までに見たように、オウエン主義と協同組合の関係を大まかに概観しただけでは、それらの間に単純で直線的なつながりがあるように見えるかもしれないが、実際はそれほど単純ではない。オウエン主義の運動史は、その継続性にもかかわらず、資金難、妥協、事業の失敗に満ちている。このような失敗の歴史について、クイーンウッドの事例で典型的に示されたように、管理能力の欠如が決定的な要因であったと論じる研究者もいる。たしかに、この共同体はその公式の地位のおかげで、オウエン主義の目玉となるように企画されており、政治的なプロパガンダの手段として利用されていた。オウエンはそのための出費を惜しまなかった。彼は、有名な建築家を雇い、ガス照明から最先端のキッチンまで、高価な設備を備えた建物を作った。支持者たちが過大な出費を諫めても負債は膨らみ続け、オウエン主義運動は1845年に文字どおりの破産を表明した⁽⁸⁾。

(5) Robert Owen, *A New View of Society*, I, 1813, p.10.

(6) Peter Gurney, *The Making of Consumer Culture in Modern Britain*, London, Bloomsbury, 2017, p.50.

(7) *Carpenter's Political Letters and Pamphlets*, 30 April 1831, quoted in John C. Langdon, *Pocket Editions of the New Jerusalem. Owenite Communitarianism in Britain 1825-1855*, PhD thesis in History, University of York, 2000, p.3.

(8) Edward Royle, *Robert Owen and the Commencement of the Millennium. The Harmony Community at Queenwood Farm, Hampshire, 1839-1845*, Manchester, Manchester University Press, 1998.

とはいえ、このような悲惨な財政難はいまに始まったことではなかった。1830年代初頭には、いくつもの協同組合が同様の運命を辿っていた。労働交換所はその典型である。1831年秋、オウエンは、ロンドンのグレイズ・イン・ロード沿いの郵便局が入っていた建物に運動の拠点を設立した⁽⁹⁾。オウエンの三人の弟子、ウィリアム・ペア、ウィリアム・キング、ジェームズ・タッカーの発案で、オウエンは「労働交換所」と呼ばれる新しいタイプの取引所を敷地内に設立したのである。この新しい施設には、作業場と小売店が併設され、オウエンの労働価値説を制度化するものであった。これらの新しい店舗では、会員（ほとんどが地域の靴修理職人、大工、家具職人、その他の職人だった）が、自分たちの労働の成果を一般の人びとに直接販売していたために、仲買人を避けることができた。労働交換所で取り扱われる品物の価格は、市場の変動法則ではなく、労働時間と原材料費に基づいて決められた。そして、職人には「労働証券」で支払われたのである。これは、オウエンがニューハーモニーで採用していたシステムだった。労働証券は、労働交換所で財を購入する際に使用でき、出資者がその売上を交換所の外で使いたい場合には換金することもできた。そして、剰余金の一部は「協同の村」の建設資金に充てられたのである⁽¹⁰⁾。競争をなくして、資本主義から協同経済に移行していくために、最終的にはイギリス国内のすべての生産者や商人が労働交換所のシステムを採用することを、オウエンは期待していた。労働交換所の運動は1831年から1832年にかけて活発に行われ、最盛期にはロンドンとバーミンガムを中心に約1,000人の会員がいたという⁽¹¹⁾。しかし、この実験は短命に終わった。ほとんどのオウエン主義者は都市部の職人であったため、供給できる品物は工芸品に限られ、実際に必要とされていた織物、ロウソク、食品などの品物は提供できなかった。そのため、協同組合と労働者階級の会員との間に意識の隔たりが生まれていた。彼らの目には、労働交換所は共同体的な生活を実現するためのたんなる中宿ではなく、同時に生活費をすぐに稼ぐことのできる方法とも映っていた。しかし結果的には、労働交換所は経済的な生活を満たすという目標を達成することはなかった。また、1時間当たりの労働にたいして6ペンスを支払うとの決まりには納得感がなく、元々の稼ぎが多かった労働者たちにはかえって怒りを買ってしまったため、ほとんど適用されることがなかった。この額は、10時間労働（1労働日）にたいする、熟練した職人の平均的な収入である5シリング（60ペンス）を基準に算定されていた。個々人の賃金の差異が市場競争によって決定される関係を残している限り、労働時間を賃金の基準とする試みが、貨幣的な評価基準にたいする有効な代替策となるはずはなかった⁽¹²⁾。

(3) 外からの圧力と内部の緊張関係

オウエン派の協同組合が失敗した理由は、財政的な問題にばかり求められるものではない。オウ

(9) *National Co-operative Leader*, 22 November 1831; J.F.C. Harrison, *Robert Owen...*, *op. cit.*, p.171.

(10) *Weekly Free Press*, 20 March and 7 August 1830; *Lancashire and Yorkshire Co-operator*, 8 March 1832.

(11) *Birmingham Labour Exchange Gazette*, 1, 16 January 1833; *The Crisis*, 3 August 1833 and 4 January 1834.

(12) *The Crisis*, 31 May 1834; Ronald G. Garnett, *Cooperation and the Owenite Socialist Communities in Britain 1825-1845*, Manchester, Manchester University Press, 1972, p.142; Ophélie Siméon, *De l'usine à l'utopie. New Lanark, histoire d'un village industriel «modèle», 1785-1825*, PhD in History and British Studies, Lyon 2 University, 2013, p.404.

エンの弟子たちも、資本主義の仕組みの中で仕事をしている人びとや政治的に保守的な立場の人たちからの、さまざまな圧力に直面していた。たとえば、協同組合が不公平な競争を助長していると見なした店主たちの不評を買っていた。1838年には、ロンドン近郊のプロムリーにて、怒ったパン屋が、地域の協同組合を設立するために開催された集会を妨害した⁽¹³⁾。また、協同組合は扇動的な組織であると見なされ、当局の監視下に置かれたままであった。1825年の団結禁止法の廃止によって、労働組合とその他の急進的な団体が合法化されていたにもかかわらず、である。オウエン主義は、それまでビジネス・エリートたちに留保されてきた経済力を生産者たちに付与しようとしていた。そのために、多くのエリートたちは、協同組合の活動によって既存の社会階層の境界が曖昧になり、自分たちの地位が脅かされるかもしれない、と感じるようになっていたのである⁽¹⁴⁾。1832年から1834年にかけて、オウエン派の運動に労働組合主義が受け入れられ、全国労働組合大連合が結成されたとき、内務省の二人の捜査官が、ある協同組合の潜入捜査をしていた。そこはロンドンの仕立屋組合であり、創立メンバーにはオウエン主義者が入っていた⁽¹⁵⁾。オウエン派の運動の歴史の中で、協同組合員は仕事と社会主義活動の選択をしばしば迫られ、多くの協同組合が閉鎖に追い込まれた。たとえば、1821年にジョージ・ミューディがロンドン北部のスパ・フィールズに設立した協同経済組合の事例がある。サン紙に雇われていたミューディは、1824年に政治活動を中止するよう会社から求められ、中止しない場合は解雇する、と威嚇された。19年後には、バーミンガム労働交換所の開設者であるウィリアム・ペアが、協同組合運動を支援しているとの理由で、地元の保守党員から暴行を受けた⁽¹⁶⁾。

くわえて、多くのオウエン派の協同組合員は資金調達活動を負担に感じていた。この組織化の進め方をめぐる内部対立は、長い間続いていた思想上の亀裂が表面化したものであった。協同組合の店舗運営こそが将来の共同体建設のための適切な手段であると、すべての組合員が納得しているわけではなかったのである。しかしオウエンは、社会変革に指導力を発揮できるのは「世論に影響力をもつ者」だけであると信じていた⁽¹⁷⁾。だからこそオウエンは、富裕な後援者が地域社会で発言権をもてるような投資計画を作って、上流階級の支援を求めたのである。1825年、ロンドン協同組合連合会は、オウエンが提案した運動方針にしたがって、ロンドン郊外に「協同の村」を建設することを決定した。ロンドン協同組合連合会は、2万ポンドの建設資金の調達を目指して、中流・上流の後援者に働きかけ、5パーセントの投資利回りを約束した。しかし、この計画はオウエンの政治的な急進主義によって失敗に終わった。オウエンは、体制内化された宗教と結婚制度が社会の

(13) *Magazine of Useful Knowledge and Co-operative Miscellany*, 1 October 1838, quoted in John C. Langdon, *Pocket Editions...*, *op. cit.*, p.260.

(14) George Jacob Holyoake, *The History of Co-operation in England*, London, T. Fisher Unwin, 1906, p.442.

(15) Thomas Parssinen, Iorwerth Prothero, «The London Tailors Strike of 1834 and the Collapse of the GNCTU: a Police Spy's Report», *International Review of Social History*, 22-1, 1977, pp.65-107; Ophélie Siméon, "The Grand National Consolidated Trades' Union, 1833-1834: Class and Conflict in the Early British Labour Movement", in Emmanuelle Avril, Yann Béliard (eds.), *Labour United and Divided from the 1830s to the Present*, Manchester, Manchester University Press, 2018, pp.21-32.

(16) Alexander Campbell to Robert Owen, 6 February 1840, Robert Owen Collection, National Co-operative Archives, Manchester, ROC/3/5/6.

(17) Robert Owen, *A New View of Society*, I, 1813, pp.11-12.

分断と個人主義の温床になっていると繰り返し批判したために、上流階級からの支援は得られなかったのである。結局、ロンドン協同組合連合会は、1826年1月までの間に、わずか400ポンドしか集めることができなかった⁽¹⁸⁾。

協同組合が資金調達最適場所であるとの考え方を広めたのは、もう一人の社会主義者、アイルランド人のウィリアム・トンプソンであった。オウエンと同様に、トンプソンは私的所有制の廃止、労働者の利益になるような富の再分配、そして自給自足的な共同体の連合体からなる社会の到来を求めている。しかし彼は、自身が設立に協力したロンドン協同組合連合会の計画が失敗に終わった後にはとくにそうであるが、これらの経済的な目標を政治的な領域でも実現すべきだと考えていた。なぜならば、「協同の村」を合法的に建設し、統治することができたのは労働者階級だけであったためである⁽¹⁹⁾。もちろんそのためには、労働者階級は協同組合店舗の剰余金の一部を利用しなければならない。協同組合店舗は、このようにして、草の根の運動のためのプラットフォームを提供するものとされ、より安価でより小さな共同体の建設へと目標を転換した。それは限られた資金調達手段しかもたない戦闘的な組合員にとってもふさわしい方法であった。ロンドン協同組合の計画が失敗したことで、トンプソンの主張は1825年以降に急速に支持を広げていった⁽²⁰⁾。その2年後、ロンドン協同組合連合会からの分派である協同組合共同基金協会は、協同組合の運営は店舗での供給を主な収入源とすることを決め、オウエンの壮大な野望を公然と拒否した⁽²¹⁾。この考え方は、1831年の協同組合大会の決議に結実し、トンプソンのヴィジョンの勝利を飾ったのである。オウエンは、自身の運動を維持するためには妥協点を見いださなければならないとも感じていたが、共同体の資金調達の問題が彼の陣営にしこりを残していたために、歩み寄ることはできなかった。オウエンにとって、協同組合は、より大きな社会主義の大義に比べれると、ちっぽけな「質屋」のようにしか見えず、あまりにもまどろっこしいものであったのだ⁽²²⁾。

2 一つの運動、二つの協同思想

結局、これらの内部対立は、オウエン主義の根幹にある一つの問題、すなわち「協同組合の原則をどう定義するか」に突き当たる。ジョン・ラングドンによれば、オウエンの支持者たちは、「地方組織の不安定なネットワークを形成し、コミュニティの建設という一つの目標を共有していた。ところが、彼らの中で共同体の具体的なイメージは共有されておらず、またそこへ至る方法への合意もなかったのである」⁽²³⁾。オウエン支持者の大部分は労働者階級であり、それゆえに、オウエン

(18) *Articles of Agreement for the Formation of a Community*, London Co-operative Society, 1825, p.14; *Co-operative Magazine*, 2 February 1826; John C. Langdon, *Pocket Editions...*, *op. cit.*, p.77.

(19) William Thompson, *Inquiry into the Principles of Distribution*, 1824; *Practical Directions for the Speedy and Economical Establishment of Communities*, 1830.

(20) John C. Langdon, *Pocket Editions...*, *op. cit.*, p.38; Ophélie Siméon, *Robert Owen's Experiment at New Lanark. From Paternalism to Socialism*, London, Palgrave Macmillan, 2017, p.146.

(21) *Co-operative Magazine*, 4 April 1827; John C. Langdon, *Pocket Editions...*, *op. cit.*, pp.80-81.

(22) «Minutes of Congress», *The Crisis*, 19 Octobre 1833.

(23) John C. Langdon, *Pocket Editions...*, *op. cit.*, p.74.

の普遍主義的な原則を, より直接的で生活に結びついた要求, いいかえれば, 貧困や失業と闘い, そして安価で品質のよい消費財を手に入れられるようにしたいとの要求にすり合わせることを望んでいた。1834年の新救貧法が貧民救済制度の改革に失敗したために, この問題は極めて重要な意味をもつようになっていたのである⁽²⁴⁾。

ロッチデール先駆者組合は, 1840年代以降に購買高配当を広く普及させたことで知られているが, それはマンチェスターの協同組合が始めた試みに追随するものであった。1830年のマンチェスターには11の協同組合が存在し, うち2つの協同組合が店舗の剰余金を組合員に再分配することを優先事項としていたのである。こうして, 自発的な共同体を建設する構想が放棄されたわけではないが, 先送りされることとなった⁽²⁵⁾。むしろ, 多くのオウエン主義者たちは, 自分たちの社会主義的な理念が政治的にはどのような意味をもつことになるのかについて, 強い関心をもっていた。当時の労働者階級は選挙権を行使できなかった。そのため協同組合は, 労働者階級の政治的な要求を実現するためにとりうる限られた手段であったのである。ウィリアム・トンプソンは, 選挙権の拡充が協同組合の原則に沿わないとは考えていなかった。労働者階級が政治的な自律性を高めて政治的な意思決定への関与を強めることで, 公共の善に貢献できるようになるためである。こうして, 選挙制度の大改革法(1832年)をめぐる論争を経て, 多くのオウエン主義者たちは男性の普通選挙権を支持するようになったのである。さらにその4年後には, ロンドンの協同組合員, ヘンリー・ヘザリントンとウィリアム・ラヴェットがチャーチスト運動の立ち上げメンバーに入っていた⁽²⁶⁾。

とはいえ, ロバート・オウエンをはじめとする正統な社会主義者たちは, 協同組合の原則のこのような変化をそう簡単に受け入れることはできなかった。オウエンにとって, 小規模な共同体などというものは自分の思想の影にうっすらと映る片鱗でしかなかったのである。オウエンは, 労働者階級の男たちは自ら政治権力を行使できるほどには十分な教育を受けていないと決めつけ, 選挙権の拡大に反対した。そればかりか, 選挙権は政治的な派閥争いを助長するばかりで, 協同組合の理念である社会の普遍的な調和に反するとさえ述べたのだ。つまりオウエンは, 無学な労働者階級には協同思想の本質を理解する能力に欠けているため, 運動に不和を持ち込むとみていたのである。それゆえにオウエンは, オウエン主義の本流から外れた人びとをどうしても認めることができなかった。たとえば, 議会改革を公然と支持し, 小規模な社会主義共同体の速やかな建設を求めて運動を展開したバーミンガム協同組合連合会の事例がある。共同体の建設をめぐる思想的な緊張は1832年から1834年の間に頂点に達した。選挙権を中間階級の下層部に拡大しただけに終わった選挙制度改革の失敗は, イギリスの急進主義者たちを激怒させた。議会改革にたいするオウエンの煮え切らない態度によって, 1832年の協同組合大会では多くの支持者たちが運動から離れてしまっ

(24) Peter Gurney, *The Making of Consumer Culture...*, *op. cit.*, p.50.

(25) *British Co-operator*, 6 September 1830.

(26) William Thompson, *Labor Rewarded*, 1824, pp.118-119; *Poor Man's Guardian*, 19 May 1832.

た。その多くが後にチャーチストになったのである⁽²⁷⁾。それに続いて、労働交換所と全国労働組合大連合も破綻し、オウエン主義運動の歴史の第一局面が終わりを迎えたのである。

しかし、初期のオウエン主義の失敗は必ずしも協同思想の終わりを意味しなかった。オウエンが8時間労働制と大衆教育を支持したことで、いまだ多くの支持者がいた。オウエンの父権主義を批判する人びとの間でさえ、支持されていたのである。それに1834年の共済組合法が消費者協同組合に法的な地位を与え、協同組合を再活性化させていた。しかしそれ以降の協同組合は厳格な中央集権的な枠組みの中で運営されなければならなくなったのである。1835年5月1日、オウエンは、ロンドンのシャーロット・ストリート a6 に新しい本部を構え、後の「合理協会」として知られる万国全階級協会を設立した。万国全階級協会は1845年までに、ロンドン、ランカシャー、ミッドランドを中心に、65の地方支部を設立した。毎週開催された会合を通じて、オウエンと弟子たちは、オウエンの著作の文字を通じて、正統な社会主義を浸透させていった。イギリスの協同組合は、共済組合法に基づいて登記されているだけでなく、万国全階級協会の地方支部によって管理されてもいた。たとえば、シャーロット・ストリート支部には最初の女性協同組合協会も置かれていた。会員は月2回の会合をもち、紅茶やコーヒーを販売していた。この協会は当面のニーズに応え、寡婦や貧しい独身女性の協同組合住宅を建設するための資金調達を目的としていた。とはいえ、万国全階級協会に加入していた他のすべての協同組合と同様に、女性協同組合協会も剰余金の一部をコミュニティ基金に寄附していた。こういった努力があつて1839年のクィーンウッド共同体の建設につながったのである⁽²⁸⁾。しかし同時に、反体制的な共同体であるメイニー・フェン(1838-1840)、コンコーディアム(1838-1840)、パン・グラス(1840)や、それらをも支援していた協同組合は信用を失った⁽²⁹⁾。したがって、オウエンのトップダウン型の社会主義と草の根の運動との間にあった緊張関係が弛緩したわけではなかった。むしろ、これらの緊張関係は、オウエン主義の終焉に決定的な役割を果たしたのである。クィーンウッドでの浪費にたいする、協同組合員からの非難の高まりは、しばしばオウエンの専制的な指導にたいする憤りに変わった。オウエンは自身の父権主義を認め、支持者たちに「自分たちで統治するために必要な知識を獲得するまでは、専制的に支配されることに同意する」よう求めた⁽³⁰⁾。これはオウエン思想の深刻な矛盾である。どのような経済的・社会的な分裂があつても、協同を通じて乗り越えられるはずであつたのだから。

(27) Thomas Reynolds to Robert Owen, 22 March 1832, Robert Owen Collection, ROC/17/12/1; John Powell, James Powell, *Proceedings of the Second Co-operative Congress*, p.13; John C. Langdon, *Pocket Editions...*, *op. cit.*, p.47.

(28) *New Moral World*, 27 December 1834 and 9 May 1835; George Jacob Holyoake, *The History...*, *op. cit.*, pp.135-136.

(29) *New Moral World*, 6 June 1840; W.H.G. Armytage, *Heavens Below*, London, Routledge, 1961, p.145.

(30) William Lovett, *Life and Struggles of William Lovett in His Pursuit of Bread, Knowledge and Freedom* [1876], London, McGibbon & Kee, 1967, pp.40-41; *Minutes of the Third Co-operative Congress*, 1832; George Jacob Holyoake, *The History...*, *op. cit.*, p.120.

3 失敗と再生、神話の創作

このような波乱に満ちた歴史があったにもかかわらず、オウエン派の協同組合に関する研究者の説明に失敗の問題は事実上存在しない。この物語はより広範な政治戦略の一環として生まれたものである⁽³¹⁾。マルクス主義からの批判によって、1848年以降のオウエン主義は一時期歴史の片隅に追いやられたが、オウエン主義運動は1860年代の協同組合の復興期に再発見され、その後も、1884年以降はフェビアン協会によって取り上げられるようになった。オウエンはそうしてイギリス社会主義の父であり近代的な協同組合の父でもあるとの称号を受け取るようになったのである。このことがイギリスの左派に、マルクス主義の影響を受けることなく、社会主義の国民的な伝統を確立することを可能にしたのである。とくに、階級闘争と協同思想は対極的であろう⁽³²⁾。クィーンウッドの大失敗とオウエン派の共同体の諸々の失敗は、生産者と消費者の協同組合の中に秘められている「現実的な」社会主義とはまったく両立しないものであると解釈されてきた。こうした物語がロッチデール先駆者組合の神話の創作に貢献してきたのである。このようにして、初期のオウエン主義的な協同組合の失敗は、「ユートピア主義」との非難に対抗してイギリスの社会主義を正当化するために、意図的に軽視されてきたのだ。

このような解釈をたんなる「伝統の捏造」ということはできない。多くのオウエン主義者や初期の社会主義者たちは広くこの解釈に同意して、むしろこの解釈を持続させようとしてきた。そもそも、クィーンウッドの失敗の前後の時期に政治活動を行っていた多くの協同組合員にとっては、この失敗は相対的なものでしかなかったのである。古参のオウエン主義者であり、『協同組合の歴史』(1875年)の著者でもあるジョージ・ジェイコブ・ホリヨークによると、個々の事業が失敗したからといって、協同組合の原則が一般的な真理であることに疑問が差し挟まれることはなかったという。じっさい、多くのオウエン主義者の個人的な遍歴を見れば分かるように、失敗によって個人的な情熱がなくなってしまうことはなかった。ジョージ・ミューデイの人生はその好例である。1824年に協同経済協会が失敗に終わったときも、ミューデイはそのすぐ1年後に故郷のエディンバラに共同の利益協会を設立した。この協同組合は600名の組合員を擁し、食料雑貨店とパン屋を併設していた。しかし1826年には、ミューデイの深刻な病状のために閉店しなければならなかった。こういった挫折を経ても、彼は協同組合の大義を放棄することはなかった。1848年に彼はオウエンに手紙を書き、ロンドンに医療協同組合の新厚生組合を設立する意向を伝えた⁽³³⁾。

いずれにしても、失敗しても前に進もうとする意志が協同思想を持続させていた。協同組合の理念がクィーンウッドを存続させていただけでない。ウィリアム・ペア、ヘンリー・トラヴィス、ジョージ・ジェイコブ・ホリヨークといった初期のオウエン主義者たちに、19世紀後半のあらゆる時期にわたって、かつての指導者の思想を前面に押し出させ、そうしてイギリスの左派の伝統の

(31) Pierre Mercklé, «Utopie ou “science sociale” ? Réceptions de l’œuvre de Charles Fourier au xix^e siècle», *Archives européennes de sociologie*, 55, 2004, pp.1-26, citation p.4.

(32) Beatrice Webb, *The Co-operative Movement...*, *op. cit.*, p.430.

(33) George Mudie to Robert Owen, 25 August 1848, Robert Owen Collection, Manchester, RIC/13/77/3.

中に自分たちの地位を確立したのである⁽³⁴⁾。1869年、ペアは最初の近代的な協同組合大会を組織し、イギリスの運動の指導部を結びつけた。これが今日まで運営されている卸売協同組合である。1871年、オウエンの生誕100周年を記念してロンドンで開かれた会合では、オウエンの協同思想は、イギリス社会主義のさまざまな構成要素に引き継がれている知的な遺産であることが確認された。ペアはこの同窓会の議長を務め、反宗教的な協同組合員であったホリヨークやかつてのチャーチストであるトーマス・クーパーらを歓迎した。クィーンウッドに言及することを禁じ、ロッチデール先駆者組合の経済的成功に焦点を当てることで、かつてのオウエンの弟子たちは一つの重要な原則「協同組合共和国」に発展させることができた。それは「国家の中の国家」と見なされた。そこでは「生活に必要なほとんどすべての物資が協同で生産され」、各地方支部を「自活して、自己雇用する共同体」に統合する⁽³⁵⁾。クィーンウッド型の「協同の村」の建設はもはや議題に上がることはなくなったとはいえ、オウエンの個人主義批判と制御不能な資本主義にたいする批判とが、生産・取引・消費を通じたすべての経済的な領域を人間化しようとする、後世の協同組合員たちの願いの中に息づいていた⁽³⁶⁾。

しかし、この解釈には、協同組合と共同体との間に引かれた作為的な区別を前提している点で問題がないわけではない。じっさい、オウエン主義者たちは、これら二つの存在を切り離されたものと見るのではなく、むしろ同じ目的を達成するための二つの手段であると捉えていた。その目的とは、オウエンが再生社会の理想郷と呼ぶ、「新道徳世界」の到来である。したがって、初期のオウエン主義の共同体主義的な側面をなかったことにしてしまうと、オウエン主義の協同思想の実践と言説の中にある複雑さをも消し去ってしまうことになり、オウエンの社会批判と普遍主義の夢が目指していたものを見落とすことになってしまう。事実、オウエン主義の最終的な目標は世界変革であった。経済的成功によって、合理的な協同の仕方の象徴であると称賛されたロッチデール先駆者組合でさえ、「自給自足的な生活共同体」の建設に熱心であったし、後にはクィーンウッド共同体の設立基金に剰余金を寄附するようになっていた⁽³⁷⁾。一方で、このような初期の協同組合の失敗にほとんど言及されないのは、オウエン主義の理想主義的な側面への自信のなさの表れである。しかし他方では、これらの協同組合を共同体主義の解毒剤として称えることは、フェビアン協会が正しく反論していたように、マルクス主義による「ユートピア」社会主義と「科学的」社会主義の区別にお墨付きを与えてしまうだけである。この点に関する解釈上の揺らぎは、オウエン主義が破綻した1845年以降も、協同思想の定義をめぐる思想上の対立が拭いきれないままであることを示唆している。1868年、協同組合が商業主義的に変質していく中で、ヘンリー・トラヴィスとウィリアム・ペアは若い世代にたいして次のように警告した。「私たちは、ただの商店主たちの国のままの状態に甘んじてはならない。協同組合は社会全体の再組織化をもたらすものでなければなら

(34) J.F.C. Harrison, *Robert Owen...*, *op. cit.*, p.235.

(35) William Openshaw, *Labour Co-Partnership*, September 1907, p.137, quoted in Eileen Yeo, Stephen Yeo, «On the Uses of "Community": from Owenism to the Present», in Stephen Yeo (ed.), *New Views of Co-operation*, London, Routledge, 1988, p.236.

(36) *Plan of the Cooperative League*, London, 1847, III ; George Jacob Holyoake, *The Reasoner*, 14 April 1847, quoted in John C. Langdon, *Pocket Editions...*, *op. cit.*, p.282.

(37) *Laws and Objects of the Rochdale Society of Equitable Pioneers*, Rochdale, Jesse Hall, 1844, p.3.

い」と。この社会変革の願いは、もはや自発的な土地共同体の建設に期待することはできず、むしろ民主主義的で社会主義的な体制内での国民の政治的権利の向上を通じて実現されなければならないようになっていたにもかかわらず、である⁽³⁸⁾。ジョージ・ジェイコブ・ホリヨークもまた、後に同じ主張を繰り返した。ホリヨークの精神にとって、個々の協同組合の失敗や閉鎖は、強欲で何でもありの経済的利益の名のもとに協同思想を「変質」させてしまうことを正当化できるような理屈ではなかった。勤労者共済組合法（1852年）のもとで、協同組合の事業活動が公認された点で、協同組合には他の相互扶助組織とは異なる特別の法的地位が与えられていた。この法律によって、生産者は実質的な事業者として認められ、そうして生活水準を向上させる手段が付与されたのである。しかしホリヨークによれば、このことは同時に次のことを意味していた。「産業パートナーシップの原則が労働者によって採用されている場合には、それは放棄されることもあるが、取って代わられることもある。外部者が株主として入ってきて、協同思想に配慮せず、組織を掌握し、協同組合員の議決権を圧倒して、自分たちの利益を生むための株式会社に変更してしまうこともできよう」⁽³⁹⁾。

このような言説や実践を敷衍すると、協同組合の失敗は、理想主義の行き過ぎによるものではなく、むしろ協同組合が元々もっていたユートピア的なヴィジョンの喪失によるものであった、と理解すべきである。この意味でユートピアとは、クィーンウッド共同体が象徴したばかばかしい夢想ではなく、むしろ「常識的な人びとが実践したり表現したりすることのできない世界を描くための青写真」である、という積極的な意味があったのである⁽⁴⁰⁾。

(Ophélie Siméon, Sorbonne Nouvelle University, Paris (パリ第3大学))
(ゆうき・つよし 埼玉大学大学院人文社会科学部研究科教授)

(38) Henry Travis, William Pare, *The Cooperator*, 11 April 1868, quoted in J.F.C. Harrison, *Robert Owen...*, *op. cit.*, p.201.

(39) Holyoake, *History of Cooperation...* *op. cit.*, chapter XXX, "Co-operative failures", p.441.

(40) Michel Lallement, *Le travail de l'utopie. Godin et le Familistère de Guise*. Paris, Les Belles Lettres, 2009, p.12. See also Gregory Claeys, *Searching for Utopia. The History of an Idea*, London, Thames & Hudson, 2011, and Ruth Levitas, *Utopia as Method*, London, Palgrave Macmillan, 2013.